新局玉石童子訓

巻廿三

へ 通 3
1279
38

村田

新局玉石童子訓巻之二十三

東都　曲亭主人口授編次

第五十三回

季彦孤忠東西ふ履歴を
範的奸悪縦二郎を寛も

登時韓錦の間貫佐用二郎ハ松煙斎と問答の語次ふ他ハ已ぶ亡父親佐用六故世の故朋輩ゑうまと。茲ふてゞ少知らく。凝の霧いまゞ正晴れバ思ひ膝を枝めさ。先生何とハゝるやら。貴老ハ我先大人故世ゑの故朋輩ゑうふ共身髪歳ゑうー比二親の夜話ふ然者ありと信ふ。ゑる肥後の菊地家の一忠臣防守鏡四郎季子彦叟の倣まる果ふあらざるやと訝り問ハまそ然ハゞよ。我身ゑ和殿の父大人と俱ふ舊里ふ世を潜さる其比和殿ゑも弟兄ハ尚幼小ゑうー故ふ今ハ迷ふ面ふ忘れたゞハわバ。知らぎ知るようもゑ。一旦然を結びゑう。和睦の今料らぎも言の茲ふ及ゑる。是

1279
38

舊縁の盡ざる所素懐と遂るに似たれども故世主世に在る限り故りあるを孰か歎語
人切てのの心遣りに我年来の宿念と和殿に告まく思へども憚りの関壁に耳そば恩なき
あるべからんとなを佐用二郎なあまた其義なくば配慮に要る我一家兄弟は第佐さへ
作と女弟のみ用紙の弟子奈我四時八方今尚庖湢にあるべけれども他なりも都鄙心
なり洩なとそもけーしらあらんでいと請問へば松煙齋の弟四郎は四下と見なる聲と
低めて然らば意旨を盡さべし言ヨヽくとも安の在昔南朝の残燼なりけ我
舊君菊池肥後太郎武俊朝臣武勇を父祖に弥増なる孤忠義烈のなるに
のく興復の風望芒時なく肥後の阿蘇山の敗城に義旗を揚ぬしかば當時足
利家より討隊の頭人防長豊筑數州の辛大内左京權大夫義弘王數萬
騎に将としてうち向ふと安えしより駒方素より小勢なれ外に援の兵なけれ敵の
猛威に聆怯して落ちく者のヨヽの日なる然ばいそあれ武俊主に勝負を未然に

量りしより一箇の駒方を斃せしとて有一夜風雨の暗に紛れて士卒と共に
城を棄て往方も知らざりぬべ寄隊にも濡ぎして全勝の利を得ぬに似さ
まこそ然れどそきなる功なれば義奥怒を移まに人の諫を聴ぎして彼阿蘇沼の
蛇穴を燔て狐に凱陣をなりける此なり是永正六年巳巳の春二月のなかばを二十
餘年の昔ふるぬそれよりして世いよく乱れて京師に戰馬に荒るまで東西の海風
波喋に困民安らぐる所の中に武俊君の夫人をそ八まけるに芳宜の方と安え
あると阿蘇の山里に潛せまりて給事なる者に我四郎季彦夫婦と和殿の
二親只是のみ俱に馬を飼薪を樵或に潮を汲み貝を拾ひて辛苦浮世を不樂に
らに小芳宜の方に仕まりて武俊主の御往方を悄々地に索まれど生死存亡を
知るもなく只悲なりける光陰のみ立と早く十稔を歴ける永正十五年の秋の
時候和殿の父大人故世更有一日咱ぬに譚ぎるに屬日人の噂に安くに舊君

太郎武俊君ハ阿蘇山落城の初より。東国の方ヘ世を避めて近曽身故
アるひーとも覚えず或ハ猶存命てさすらへまもとも云へ。虚実詳ならぬ。這里ハ
頷とうち合て徒ヘ物を思ひんより。咱ハ宅春と携て京浪速へ出ばやと思ひ然れば和殿夫婦のもとへ小芳宜の
巡歴せて。我君の御所在を索なばやと思ひ然れば和殿夫婦のもとへ小芳宜の
方ヘ給事あて衣食其餘の東西まで調達をうらとうく太義なれども光
陰ハ関守あるとなれば壮年の今思ひたて氣力と俱ヘ脚腰さへ衰へる老後ヘ
至らば千里の逆路を欲するともいかあて克せんや。その義を何と思ひめと問れて已
咎るもう彼も住るも忠義の外ヲ。和殿ハ遠くその地を去て彼れ所在を索ねまり
咱ハ夫婦ハ留りて。夫人ハ仕へまつらんあたらく如く便宜をもめ但老少不定命の
長短料りがたう一たび袂を分ちて迭ヘ本意を遂ぜて後れ先だち露の命の
他郷ハ終るとあらば。児子ハ幼小ー。親の契りー其人を知らぬ知られざるもせば。

作者曰下ハ源氏萬葉集松浦佐用媛云云の古歌前板大綱結局編ハ用ハ時の五文字ハ発志巳三云云と実ハ是暗記の矢今ハ不審ハ改正を看官是を思ひ給ハー

忠心義膽埋れて子孫の世ヘ知らぐるべー。倶ヘ紀を貽さん欲とうヘ故世を感
佩ー。其義是ヘ小ふるべー。紀ハ跡ヘ優を者ー。和殿ハ素より能書ー何れ一
筆貽ーのと乞れて辭ヘ難ふあらねば。躯て其意ヘ任ー短冊一枚ー。墨
摺流ー筆を染て遠ク人松浦佐用媛都麻恋ヘ領巾麻もりーとの負へる山代名
と萬葉集る古歌を写ー。その短冊と両箇ヘ裁て上の方を佐用媛ヘ授け。
下の方を我懐ヘ斂めて且ら。今とのの後年を歴ても再會の時を忘ぐくハ今
日の契りを兒孫ヘ告げて各ヘの短冊半分を授けて當時の照据ヘさせ和殿
の家子佐用二腋子ハ稍東西を知る童蒙ー況我獨女ー。俊ヘハ纔ヘハ五歳ヘ
とぬ憑ー。からぬ者ーれども幸ひーて共侶ヘ本性尚古の志あらば後の裨益ヘ
やせん。とうヘ佐用六便諾感じて然らば亦所望あり我家子佐用二郎と和殿の令
愛拔ヘ童女と目今親の心ーて結髪の夫婦ヘ做さば年久ー逢ふ事ー

親の契りと云れむとして迷ふ所在を尋索めて後竟ふ妹と夫の縁と結ぶとやあらんその義誰何と談ぜらるに已是とうちなづて頭を掉りて応合るまう所も由るにふあれども我思ふ義に介らむ男女迷ふ稚なう結髪の夫婦とふ富貴舊家の上ふこそあべれ和殿と我は日蔭の花ふて児子も一所不住るふ今婚姻と定るとも生涯環會むもあらべ俱ふ徒ふ節義を守りて取らむ嫁らである云や縦手闌て環會日のありとても約莫男女の情縁は稚なき時と同ドからむ迷ふ成人るふ及びて外ふ増花あるふ至らば俱ふ厭しく思ふべし然る時は親も怨る其害あり其利多し是ふ因てこれと思へば婚姻のるは説きべくもとふ佐用六嫂再説ふ及びぬらるる趣皆理あり然らば自然ふ任せんとて密談既ふ果しかば當晩佐用六嫂は夫婦小芳宜の方の御前ふまあらて主君の御所在を索まく欲去ぬる臆念を告禀して身の暇を乞きりしかば小芳宜の方は禁めるで餘波を惜

ませ給へのと是時までも猶些の御貯禄あり日れば則餞別ふとて黄白幾枚欣賜りつ彼身の暇を含らせ給へば佐用六嫂は拝謝して逆路の准備も密密ふ其年の八月下旬ふ宅眷を送るく携へて東を投てぞ立去りける旦是よりの後彼君ふ仕へまつる者とては我们夫婦のみなれば艱苦八入ふ弥増て心細くもあり一程小芳宜の方は年来の御煩禦蘊りてやそのの次の年は春の時候より長く病床ふ臥のみて鍼灸薬餌の験るく竟ふ神去りのひしかば我们夫婦の哀悼悲泣ふ亦いかもあらぬか却ふぞ云ふあらざれば御亡骸は潜やうふ程遠うぬ山院ふ埋葬奉なまさでも世ふ憚の多れば只その御墓表ふ望夫石の三言を勒て菩提と吊ひまるる程ふ幸るうとのみうち續いて我妻音矢はその年の冬時病の瘡聚身ふ迫りて黄泉る泉ふ帰りしかば命難面く我身のみ春の雁の對を喪ひ孤孫の枝ふ離るふ異るらぬ松の操も甲斐なるくまでふ只呉竹の世と不樂て慰る者とては稚く

舊夫人ハ謁
して防守
間貫東西
留別の昔話

佐用六妻

佐用二弟

佐用六

小ゝだの方

弟四郎

女児のこゝろれば左さま右さま思惟るゝ今へ仕る君もゝ〜茲に艱苦て
ゝ小芳宜の方と我妻音矢の小祥忌を果ゝ我も回貫佐用六の志を敬
ひて〜我君の御所在を索巡るゝ年〜とあらじと竟ゝ深念を定めかゞ當年
絶ゝ七歳ゝ成る女児拔ゝと推乃て啓約あるる時佐用六叟と六路と易〜先
西の九箇國を送もゝく徧歴あゝ南海四國ゝ杖と曳ゝ日と重年と累ることを
厭ゝ這里ゝ二月那里ゝ半年我書を需る人の為ゝ逗留〜その潤筆を盤
纏ゝ元ぞとゝふとゝ二四稔と歴ぬるまで欲まる所ゝ我君の御所在と渉猟
とゝも〜それとあゝ〜便るれば更ゝ東ゝ赴て佐用六叟ゝ環も會ゝ商量敵ゝ
ゝもやせんと思ゝゝゝ京師浪速ゝ旅宿あゝまゝ他も亦何處ゝ在るや知る
ゝるれば遂ゝ越路ゝ杖を曳ゝ〜越中越後の〜ゝ〜加賀能登佐渡を推
渡りて身の久後いゝ〜知らぬ出羽陸奥の盡處までも漏ゝ隈ゝ長旅文

四五稔と歴ぬる程ゝ女児拔ゝ年闌て既ゝ二八ゝ成る隨ゝ教ざれども縫
刺の技草書も拙ゝゝ書讀むとゝ好ゝゝかば逗留の程人ゝ借りて源氏
宇津保竹採ゝゝど假字文章もあゝゝゝ然ゝて浮る本性ゝゝ第一
親ゝ孝順ゝて容止も亦醜ゝゝゝ欲まるもあゝ〜ゝかど我ゝゝ
ゝて羨引ゝ或ゝ亦逆路ゝ護麻ゝの灰人肉脛紀ゝど呼做されて他郷ゝゝ
る婦女子と勾引ゝ盗児あれゝを守るゝのゝ勤ゝ成る。然ゝも西騎旅ゝ憂
のゝゝ姥捨山の月ゝて只拔ゝゝゝ慰めらるゝて去歳ゝ信濃の山里ゝ在り。
今茲ゝ上毛武藏ゝ常陸下總安房上總ゝて尚我君の御隱宅と索なまら
まく思ゝ二月の時候ゝ那里と去て料ゝ〜ゝもの白豬の驛路と過るその日ゝ
時病發りて逗留の程和殿の為ゝ拔ゝを媒妁せられゝ送ゝ怨て結ぶ果ゝ
和睦の今ゝ至りて俱ゝ素生を解諦せば豈憶ゝ和殿ゝ是昔ゝ〜我故

明輩間昔佐用二故世更の冢子佐用二でおらんと其三親ハ世ふまさに絶ん事空ハ
ゆふ似られと親ふ優ゆ兄弟兄ふ名告逢しく尚憂ゆ為く歎ふ涙とらゆ過去
の長談偖話ふ韓錦の佐用二郎ハ胸と涙しゆ且盃て額の汗と拭ひもあ敢然る
頭と拾ひ嗟嘆ふ堪ぎ谷るゆ思ひ立ゆ防守先生貫老の忠義ハ我亡父ふ十倍ゆ
たる慕愛苦艱難今ぞゆ守くかふ我身と差殺せられんとハ抑我親佐用ハ故世ゆ
昔年肥後と辞去りて京ふ一稔浪速ふ一稔僑居して舊君の所在と索ちりふ
毫も便と辺ぎりゆ然らば東國ふ赴んと猶亦宅養と携て去の地ふ来つ料ぎ
守くふ故の領主部領の郡領武彦主ハ肥後の菊池と同族ゆ數世の遠祖の時東
西ふ別ぎ去りけれ世の人是を知者稀ゆ然れば菊池武俊主ハ昔永正六年の春の
時候阿蘇山の城没落の後一三の近習と従へて去の地ふ潜ぎ去りふ時運竟ふ
至らぎりて絶ふ三稔の後ふ永正八年の夏の時候那身時疫ふ犯ぎて命

空ぎ去りぬ両箇の近習ハ殉腹斫て同枕ふ伏しけり然ば當時由縁の
者あり彼主従の亡骸と遠白猪の驛畫處ゆ阿蘇禪院ふ密葬して南忠
主僕之墓と六言と鐫做し草表ふ表ゆ猶彼禪院の
後の山ふあり先生西ゆ見ゆ紛れゆぎもあらぎりゆ是ゆの後十稔と歴て我
二親ハ児子と引ぎて去の地ふ旅宿ゆ憶ゆ彼秘事と知ることゆ
ければ其御先途ふ逢ぎゆ悔恨ゆ共絶ゆ切く舊君終焉の去の地ふ
杖と駐ゆ去ぎ児子ゆ為ふ我生涯の謀と做ぎけれ則茲ふ居宅と卜て
武藝と人ふ教ゆ身の生活ふ去ぎけふ今戰國の習俗ゆ異の總角牛打ッ
童も武藝と嗜ぎる者あるとるけれ其の業太く秀ぎて富ふあらぎ貧しく
あらぎ世ハ倒ふ安らゆと思ふゆ似ぎ我父ハ這地ふ杖と住めゆ五稔と春育の
時候嗜ゆ酒ふ身と損れて吐血して世と去りぬ既ふ其終ふ臨て我佐用二郎と

枕方に招くよろづ送言の條々曩に肥後に在り一時同僚なりける防守氏と共
侶に武俊主の夫人なる小芳宜の方に仕へまつり。その事の首より末の地に来つる尾
まで絶えとまる息の下に其崖畧を説示して且くら我身その地に住若し其
比よりいくぐ舊里阿蘇山なる防守氏四郎に消息して舊君太郎武俊主の
その地に早逝去ぬゆゑと宣へる彼上の実説を詳に告げやと思ひざるにあれども
いふせん肥後の舊里に其路二百十數里の山と海とに隔絶せ況乱世の不自由なる。
脚力郵書の便着るし非如鴻便あるとても世の人も憚りぬる一大事なる我
秘書を人他に遣下がるる汝のまろと泛そ財用餘りある日もあらばいくぐ故郷へ
赴いて彼方ざまを訪まるそ防守夫婦に我宿念を云云と告ふかし遊莫汝
ど親に携られて阿蘇の山里を去りゆ比に尚髫歳そなるし年闌て防守
吏に名告逢まくまねるとも既に迷に面忘れて疑るもあらん其再會の照

据ゆへ我身袂を分りそろ孤四郎が書一古歌の短冊あり。其短冊と両箇に
裁てその半分は我方に藏めて今尚茲にあり是と汝に渡せべし。護身嚢に
秘措いて異日の用に達よかし。其半分は孤四郎が必や秘藏まるるらんかぐろ正
あらば符契なれば再會の折是と取出て。他に見せまば疑はざるべし。その餘はいろ
云云と貴老の令愛拔ゆ童女と我ぐ為に結髮の約束せまく欲ちしに貴
老は敢美引ぎ理りを演て推辭ゆひしに。その言の顛末まそ霜の朝に鳴く虫
なるも。細まる聲を励して。告示を者半晌許其甲夜の間に呼吸絶ゆ我
身の不幸は是のみならで母親も亦その次の年。癰てに瘡の背に出て病とい
ぎ不一かぐぞ躰て空しくなりぬ。四月八日と忌日とを二親共に阿弥寺なる舊
君の墳墓の頭ゆぞ葬りけ。我身不肖にあれども是よりの後志を將て親の
箕裘を美嗣て武事力藝をもて人の師に倣ひ学て敢家聲を貶さず俠を磨ま

氣を使ふて後れを攬らーとのみ思ひ、只是血氣の惑ひるるを先彼符契を見
まほらんとうちて肌膚囊を搔捜りて彼短冊の半分を含ませ引伸を程ふ
親の身邊ふ側ゆせる。拔ふい蚤くろろ項ふ拭ふる護身囊の括を用ふる
その短冊の半分と半ーつ。袂と掖ふて親ふ遞與せば。季彦やとら受とて勝を
找めて此彼両箇のその短冊ふる合せて見もー見ふ稀代の符契佐用二郎ふ感
ゆふ其短冊の上に方を。遠ふ人松浦領巾麾りーふと二行ふ讀れ松浦齋の防
守筑四郎丞寸彦が山きるる其短冊の下の方を。佐用媛都麻恋ふ負ふ山の名と赤
是二行ふ讀れる是を合ーて吟ずれば遠ふ人松浦佐用媛都麻恋ふ領巾麾ふ
ふ負ふ山の名と連續ふる名歌の高調。を写ふーも能書を。同筆同紙ふ
疑ひなけまば韓錦の佐用二郎ふ又縦ふ見ふ横ふ見ふ奇ふ奇ふと駭嘆ふ外ふ
詞ふるるける。當下防守季彦ふその短冊を故の如く分ちて斂め斂めさて悄然ふる

貌を改め佐用二郎ふうち向ひて。通ひ韓錦。和殿の孝義虚ーかねど。相別れて
ふる十二年親の貽ふー符契の短冊料らぬ相合ふ。ふられかくふる何ぞ。ふらん人を羨
むふ似てれども大凡ふ人の命運ふ遲速あり厚薄あり和殿の身を故世更ふ主君を索
孫まるんとそ小芳宜の方ふ辭稟ふ宅春を送ふ携ふて故郷を去りて草枕旅ふ
在ると久ーからぬ料らぬもふの地ふ来て舊君太郎武俊主の世ふ在さるーを拷ふく
其墳墓を見ることふる是ふ時運の速ふ遲ふ知又児子二名あり。両箇ふ
則男児ふ。親の家業を継ふ足れり。其心術も推て知るべー我身ふ他と同ーからぬ初
故郷ふ在りー時小芳宜の方ふ仕まるーー忠信郎義の甲斐ふ。ふ彼君御命長
らで世を去りのちて幾程もなく我妻音矢も逝ーよるかつふる黄泉の客ふ。ふりぬ跡ふ送
ふる幼少ーー這個の女の子拔ふるを外ふ資ふる男児ふければ所ふ多の遺ふる方ふく
いふぐ主君の御隱宅を索孫ふらばやと思ふる。當日絶ふ七歳ふふる女児拔ふを

携へて萬里の逆路に赴く。今に至りて八九年憂苦艱難いふまでもあらず。是年
今月這地に於て主君既に世を去る。人の數に入らぬと只人傳に聞くのみ思ひ
き。亜餅に做りて父女法師にみらんのを。是命運の窮まるにあるまじや。初我和殿に參る
別る時再會の符契に代てこの短冊に写し遣す。萬葉集の彼古歌に問ふ。佐用六とは
防守統四とは迭の姓名に寓れるを深く意味あるとぞ。今思へば以あ
るに似たり。何とぞ小芳宜の方の御憂死に在昔松浦佐用媛が良人大伴挾
彦と恋慕のあまり領巾麾りて死して石に做りしと古俗の口碑に伯仲まべし。
然れども彼御墓表に望夫石の二文言と勒せる自然に似たり。況臣季彦等
鰥寡にして稚子女児と逆路に伴ふ辛苦の折々故妻恋しと思ふ時々女児撥
でゝ孝順なる母と慕ふて泣く日に稀へ皆是逝てかへらぬ船の跡なきを見て腸を
断たるゝ追慕憂哀今昔人情同一致なる。抑亦奇なるまじと過去来し

諄復を親の歎に拔るゝ慰難て鼻うちかむれ心も倶に眷近に入相の鐘
鐘々なる。黙燭時候ふるゝけり。當下韓錦の佐用二郎に松煙齋李彦の述
懐を写く問ふらく恥て抬難き頭を挙てらひけるもう忠なる哉防守先生貴
老の初め終始錯ぬ苦中の苦を喫しても其志穆らざるに和漢古昔の精忠
義烈彼賢哲も恥ざるべ。是に就ても朽惜くらひかゝるに我親に我身彼子
とて亡父の非と云云と論ぜ死ぬ為ども今公道をもて思ふに其行ひ正か
らぬ是を貴老に比れば雲と壤との差別あり。蓋我父佐用六も舊里に在り
時主君の夫人小芳宜の方と。ふり捨て見えらぬ。小後這地に旅宿して舊君逝
去の實説を写くとの人ども殉死もせぬ追腹斫る彼両箇の近臣及がくに切て
頭を剃圓めて彼御墓提を吊ふ然る志あるとなく是より家と営まて児
孫相續長久の計に暇なるゝ施忠薄義とらひべ當時我身に童年也。

親の由来を備ふ知らねば諫ざるを憾とを非如今親の為ふ其非を飾りて説瞞
るとも人をだらく欺くべく寧天をば欺くべからぞ後の世ふ是を知る者ありぬ事ふ載て
必論せん悲しん哉我身ハ親ふぞも及ぞ忠もるく孝もるく前の日亡人の友ふ避
近ぞるぞ出處来歴実名假名を問も訂さぞいふぞ威勢ある人の為ふ其苗を
妾ふとそ媒妁をるを聴れねば怒りて飽まで出るく慢侮の罪ハ和睦の今千言萬
語とりて勸解るとも鄙語ふ屁放て後ふ尻を合るふ異ハるら我身の臭氣を
思ぞ恥を知らざる者とらまん知らぬ以前ふ至りて防守主其身の孤
忠少女の孝順言詳ふ知る上ハ我身の罪こそ最重れ縦先生佛意をもて
我罪戾を饒しゆとも我何ぞの面目ありて世ゆも人ゆも交参ぞ是より弟子
ぞも疎ぞて従ふ者るぞ只胡慮ふ做らんを已るく。とるふ傍ふ措ける長中
刀を含るるも金く引拔て肚を斫まくそれぞ季彦敬駕ぞ推禁ぞる

何支ぞ狂乱ぞる狡先ぞ刃を放ちそよと詞急迫しく諫れば拔るも俱ふ敬駕ぞ
るぞら父の後方ふ引添ふる。然れどそ佐用二郎ハ止るべくもあらぞれば思切る聲
震ハして防守主禁めゆる今我自殺ハ親の為ふ不忠の罪を贖ふぞく我僻事の
遣方るさふ身を潔くせんと思べ其首退ぞや。敦圉る。猛威止るくもあらぞ
とバ次の間ふ竊聞ぞる奈良櫻の佐之七と押繪も俱ふ胸を淺しる燭を
乗りて走り出ぞ。ぞよ為ぞと左右より抓着抱縮ぞ刃を奪取ぞれぞる佐
用二郎ハ毫も撓まぞ。ぞれ八重作禁るる。押繪も要ふ怪我るるぞと左右と脚を
挿しぞ寄るぞ突退揮拂ふ必死の覚期ふ八重作押繪ハ力足らぞるふあらね
ども左右るく刃を奪難て只爭ふを鎮ゆあぞ。ぞ祢るくぞ見えふける。作者曰の段の出像ハ
前巻二十二第五十二回の編左ふ早く。ぞ程ふ大江杜四郎成勝峯張弟六郎通能の郷岡ふ
出ーたり。看官宜ーく佛見るべー。田文の茂林遠ぞ地藏堂ぞ詣んぞ一路人るる蹈鳥森松煙齋父女と主人樅二郎

なるに一霎時別をそ。彼佛堂に赴きつ拜みて其頭を看亟りて。黄昏近くなるに隨ふ。
いそぎて倶にかへり來て。韓錦の庭門より枝を入らまく來るより。主人韓錦の佐用二郎を。
松煙齋の防守筑四郎と。晤譚最細やかにて。迭に説つ説示さるゝ。彼舊里の
事又小芳宜の方の事又短冊の契の事。菊池武俊の病死の事又佐用二郎の
父間貫佐用六の落義曲直筑四郎李彦夫婦の孤忠義胆の事の顛末都
蘊會話の最中にてありけれバ。そを驚かさんハはゞかりて。倶に小柴の離邑の蔭に
立在て言の果るを俟程に。聞くともなく彼條々を聞て嘆賞感激に堪ず。
猶再び儘にありけるに。主人韓錦の佐用二郎ハ義理に迫り先非に羞て自殺せん
とて狂ひしを。松煙齋ハさらなり八重作押繪も禁れども止るべくもあらざれバ。大江主
僕ハ惊難て立顕れて母屋に入りて。諌制る両聲烈しく。韓錦主狂ひさせて我们方
僕かへり來て。憶ずも彼秘事を洩聞て感心の外あらざるよりて。識れべきことそあれ。

みづから血氣の勇を負をそ匹夫匹婦の溝瀆に縊るゝに倣らふ狹とられて驚
く佐用二郎ハ憶ずも拳を緩めつ。通能透さず衝と寄て刄を奪ふて八重作に。
遞與せバ押繪ハ鞓を拾ふて斂めて丹が儘携て走りて奥へぞ退りける然れバ時ハ
奈我四郎ハ這時までも出後れて次の間に潜まりて居り迭に唄に領りて裳を端折両
袖褰げて蟇の像く突然と走出つ聲高やかに大事を知る大江峯張覚悟をせ
よと叫びも果ず。左右一齊組んと競ふを成勝と通能ハ驚ろかず毫も噪がず。
倶に身を反し空を䠇らして脚を飛して撲地と蹴る修練一對白打の精妙。時ハ
と奈我四郎ハ吐嗟と一聲叫びもあへず身を轉して簷廊へ仰反仆れて平張けり。
當下主僕ハ佗と睨へて噫踈忽之両箇の力士なる我们料らず彼密語を洩聞
くとても交遊の義に背きて利に惑ふそ。豈告訴する者ならんや人を知らざる烏
滸人かなと両聲高く窘れバ佐用二郎と八重作ハ果れて咲ひを忍びつ。時ハそるを

叱懲して。為ふ主僕ふ勸解しかば成勝と通能ハ合咲ゑう坐と占て。ちゐゐゐ
ゑゐ安堵ゑう。今の擬勢い戯ゑゑん。と云間ふ時八奈我四郎ハ身を起し頭を
敲いて疎忽の罪を勸解ふけり。是時既ふ日の暮しかハ八重作ハ時分ゑと立ち
夜の儲をせんとて。俱ふ庖厨へ退る程ふ押絵ハ行燈引提ゑて。四下を照しゐ早主僕ふ。
無異の歎ひと舒るゑと成勝と通能も押絵ゑと労そ。更ふ縦二郎ふ向ひく
ゐゐう韓錦主和殿の一義い我们明日まで預るべし。退りて休息まゐゐやと云
ゑて佐用二郎義ある色ある膝組直して合るゑう。在下自殺を欲ゑい実ふ短
慮ふ似れども。防守叟の孤忠を守てふ親の為身の為ふゑ解ゑ詞ゑ。然れ
ども自殺を允されざゐ。この年来の侠を捨て。桑門ふゑらんのと云ふ流四郎推
禁ゆそ。そも亦血氣の惑ひゑらん。和郎ハ舊君武俊ふ仕へふゑと彼君既ふ世を
去りゐて。孰ゑ為ゑう忠義を盡さん只世と共ふ推移りて身を保つをゑそ孝とゑ

ゐゐゐふゑの義を思ひゑうまゐと。説れて佐用二郎沈吟して黙頭つ答るゑう。諸君の
意見感服せり。然ら亦情願ゑう我乳名の佐用二郎ハ父佐用六の俗稱と取ら
ゐてゑるふそゑらむぞらん。ゑれども古昔の松浦佐用媛ゑ良人大伴挾彦ゑ新羅
征伐の將軍として水路と彼國ふ赴くゑう。佐用媛痛く恋慕ゑて死ふ至りゐと云ふ
貞女と文字ゑと異ゑれ唱ゑう父子も廣字い即間貫ゑそ佐用六佐用二と唱做せども
忠ゑゑく貞ゑゑ。然ゑと彼名ふ摸擬せん恥と知らざる者ふ似ゑうゑの故ふ氏を
一棄て。猶幾ゑでも韓錦縦二郎とられゑと後安くゑべけれ我弟八重作もゑの意ふ
倣そ。間貫佐之七の舊名と告ゑとゑく只奈良櫻安八重作と喚れんゑそ相応しか
らめゑの義甚麼と談ゑれい衆皆好と稱ゑる。斉ゑ中ふ成勝ハ始て屠蘇頭で
以ゑる哉主人の用心在昔孔子い盗泉と飲ゑず曾子ハ勝母の里ふ入らずと云ふ故事ゑゑ表
裏ゑそ。恥て貞女の姓名を避ゑい新奇とゑうべ。是ふ就ても防守叟賢老ゑ

年の精忠義胆和漢の先哲時彦と称するも及ぶ者稀なるべし只舊君の見参の素懷空しくなりしのみ外ふ悲しく痛き送憾さのさぞかしと慰められて筑四郎扶るも倶ふ法然と坐ふ涙昏たる打くくに車作時八奈我四郎運ぶ夕饌を佐用二の樅二郎見うるて現鉋するに支ふ紛れて夕飯屋滞ふ及びかぬ

ゆゑ物欲しくもあるも疎菜なれども打ち甘ぐて食ゐく押給も出さく給侍を

せまやとふふ衆皆相謝して儲の饌ふ就く程ふ樅二郎ハ一番妻時を辭して

奥へ退りける有右夕饌果しかば四箇の客ハ時八若ふ寝内せらるべく迭代ふ

浴室ふ入りて浴する程ふ既ふ初更ハ過ぬべし昨宵ハまく不睡なる主客の疲

労一入なれば押給ハ奈我四郎ふ指揮して為ふ臥蓐を儲しかば各枕ふ就

ぬふけ。其詰朝弘四郎季彦ハ早飯を果まと躰て單阿甦寺ふ詣く。

舊君菊地武俊の墳墓ふ拜謁して香華を賜けて廻向の程思ひ

諄復ふ。懷舊の涙ふ堪ぎ這日當寺の住持を訪ふふ即ち久く對面せらふ

ふ當寺の先住ハ素是肥後の人氏ふ在俗の日菊池生ふ舊縁あり。

武俊阿蘇山を没落の後ふ寺ふ来て潛居ふ及ぶも是ふるの由縁あれば。

然れば現住閑廊和尚ハ即先住の徒弟ゆ尚古の老實人なりけるべ季

彦一話と交へしふ迭ふ捨がたきあり是より後も季彦ハ父女ふの地ふ逗

留の程日毎ふ阿甦寺へ詣るを彼身の務ふあらける間話休題韓錦樅

二郎ハ季彦扶るるを相迎へて宿所ふ留めし次の日ふ此二の酒肉を調理して。

大江主僕共倍ふ酒盃を遣西して いよく交遊の義を固うせまく思ふ程ふ韓

錦の弟子なるハ早く彼顛末を伺ひて故人珎客逗留の歓びを表まるとて東西と

贈ふをヨヌかりける。开ゞ中ふ僻めて韓錦ふ彼少女を取女りしとその壽

祝を致ふ者さへありしかば樅二郎うち笑ひてそる偽ゆの錯誤る我ふ夫を娶

アーとあらぎぞその壽祝に要るーとそ推辭て敢受ざれども猶生憎ふ賀き事
者日毎ふ間断ありとるければ憶ふも日と兼ねて四月も下旬ふるふけり當下韓
錦樅二郎ハ單肚裏ふ思ふ曩ふ我謬て郡司殿ふ憑れて彼少女と妾ふ
媒娶せまく欲ふーふそのる成るべくもあらぎるべ怒ふ乗して出たる彼條の崖
畠ハ殿も沙知りてとハまるるーハ然るを因ふ怨地を易て和睦まくるのるるーハ彼
父女と我家ふ留め在らまる今ふ至りてその故ようと云云と殿ふ告稟さぎ
我身必然らまん只明々地ふ稟まふまぐと尋思とまるく八重作押絵
まる大江峯張ふも意表と示まて事の利害と向けふ孰とそ異議まふ
者もなく然るべーと応ーかば樅二郎まろ決して次の日の早旦より梳髪さ丹衣
裳と整へて當郡の領主なりける鏑野郡司軍舎ふ単赴て隨即拜見を
乞けるふ俟と約半晌許遂ふ喚入れて對面せらる是時ふ軍的の左右ゆを

最苛め紀両箇の近習樅二郎と虎目ふ向けて只是ものを仕りたり然まば韓
錦樅二郎ハ軍的ふ見参して寒暖と舒無異を祝して彼一芝を告まくるふ
軍的ふその言ふ果るを俟て勃然る聲震立て樅二郎近く找て彼汝ハ憑ふ甲
斐なる紀者と我日屬より汝と思へばあそ曩ふハ最ふ怪ぐ紀とを
まるうち出て彼媒娶と禾女ふ汝力ゆそその事成らぎさそ已え
介るを何そや彼少女と悄地ふ宿所ふ引入れて娶りく相愛まるハ言語同断
とふ思べ其ゆ風聞隠れるふ我ハ知らぎと思ふらん今さら何の面目ありく詰
来く虎威と犯さまくまるや取るーもふ檻松児るりとらまて樅二郎阿容
たる色るく頭と抬げて答るやう开ゆ御諚で必ども小可何ものの故とりく彼
少女と取娶るぎ知らざる者の推量とりて然る風説を做さまくまらん抑吏の
者實ハ箇様々々ふそ初樅二郎ぎ怒ふ乗して彼父女を逐し時彼ものハ

夕人ハ跟らまとく。行李も盤纏も喪ひしと。立合阪ハ露宿のそ。その崖畧戍演説しそ。且ハ〻そ。その比彼父女と憐ぶ者あり。小可と非分として。寛解て和睦を執結ちるハ及ひて。彼ら〻ハ素生と問考るハ思ハさりけり。彼少女の親ハ我父佐用六の故友ゆそ。昔故郷ハ在りし時莫逆無二のよも知られ又彼少女ハ稚き時結髪の良人あり。相別しより往方を知らねハそ所在を素んとそ。廻囲ある者ハ有数ハふちも措かさるハ。姑且我家ハ止宿を許して。盤纏を取らせそその投を方ハ出し遣らまく思ひのそ。彼ら〻ハ御意ハ従ハそ。艱苦をそハ厭ハさるしハ素よゆ彼少女子ハ結髪の良人あれハとあの義を稟しし上んとそ。推参仕りぬとハ。せも果ゆそ軋的ハ呵々と冷笑ひく。口々横ハ烈衣うとそハ〻べくいろ〻あるハ非除子貢の辯舌とゆそ。火を水ハらひ做もとも。孰ろそれを實言と安くべ公達たるゆるゆらハ虚實を正さべれども。始とハ〻べ我も亦面正しくもるとそれハ這ハ枉て

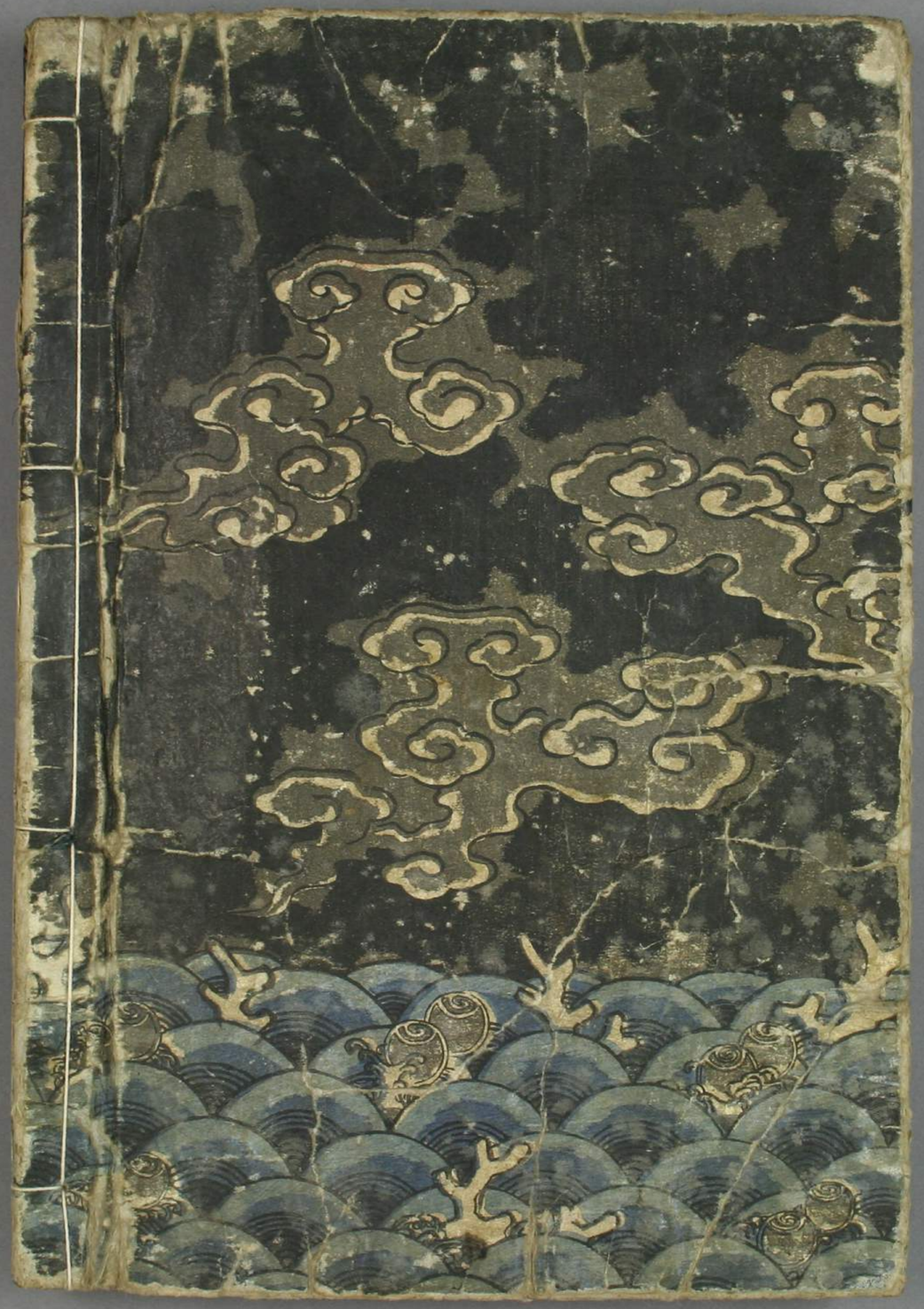
饒しもせ。以後と佶と慎ミねと。ハ〻ハ件の両箇の近習ハ共侶ハ額を衝て。今ハ
ゆそ寛仁れ大度他ハ頭を續れハ。ハ〻ハ御恩ハひと。執合ハれハ軋的ハ然
ハ〻ハ領ハ。樅二郎ハうち向ひてやとれ韓錦汝ハ知らざる欲他ハ
我股肱ゆそ鬼薊苛三唐築鍼持隈八刺高と喚做して。武藝ハ肌力一人
當千倶ハ一方の旗頭ハ做もとも要ある者ハ扇谷殿朝與ハふハ傭れて年
来河踰の城ハ在り昨今其役果しハ倶ハかり来て又咱ハふ扈従ゆそ。相
識ハふりねハ。とらまとく苛三隈八ハ其方ハ膝を推向て豫ゆそ。韓錦和郎
再生の御恩報しハ一術我ハ教ゆそ。と誘るとハ軋的ハ安て開ハ一段興
あべ。ハの夏の日のひと長ハふるとハ空しくやハ銷ゆそ我ハ一覧せまく欲ゆそ。
とく。と促せども樅二郎ハ従ハそ。莞爾と笑て答ふハ。御諚兼りハ〻べども勝負ハ
時の郤舎ゆそ。弱ハも強ハふ勝とあり。怨を結ぶ媒ハれハ。御敵ハ望ハ〻ハ。

力藝と著して
韓錦酷く苛ム
隈八を懲
のりまと
ゆみ二郎
隈八
のりまと

況所挾這御坐席を。敷る劍角紙い不便ゑ猶又折もいん。今日いんたさを。
とらるもの果ぞ。軌的い眼を睜り聲苛立て。そ。鄙性ゑ和郎ゑ似げ。他
両箇を見貶て敵るふ足らぞと思ふる狡最島滸ゑ。徳ぞれい。樅二郎舞ゑ
ようなく。あらんゑ是非ふ及ぶ何れ仰付られよとゑを苛三うち。空く坐席の試
敷るい種々あり。遊莫腕推枕曳い小児の戯ふ似なべ。只坐角力とそあるべけ。
とらふ隈八も找を出く。鬼剪且ぞ紅我们両箇ゑ。韓錦い身單ゑ然まべ
とそ他一箇ふ二人蒐ら勝ても恥ゑ。年齢役ゑ。鬼剪和殿揉一揉ゑ咱
ぞい行司を仕んゑの氏甚麽と啓れい。軌的ゑ。うち笑く。隈八が言寡ふ
理あり。とやくせぞや。とゑぞ。く。躾て席を改ゑ。苛三と樅二郎ゑ程ゑ。處ふ退
く。迭ふ袖を褰身と構へ。膝と合て組ゑ。當下鍼持隈八ゑ扇戎
颯と推啓れ。その身を斜ふ隻膝立く。間を隔る角紙の作法。一霎時呼

吸を覘ゑ。やと曳く扇と共倡ふ苛三い出ゑ。より蒐りて。金く利を樅ら
くゑを。樅二郎い毫も透さぞ。振拂い遣違して。推い推れい疲労を俟ば苛三ゑ
糾ゑ。ゑ像く眼眩ぞ。術ゑ。ゑを。樅二郎い程とそ。ゑれと。猿臂を伸し項上
抓て。弱腰。と撲。悩ゑ。力士の剽捷果。後視の。ゑと。弄ふ異ゑ。苛三ゑ吐
嗟とゑ。二間ゑ。投棄されて。彼身い庭の巻石ふ額を拓し。血を流して。死活も知
らぞ。仆ゑ。ゑ。倶ふ驚く。鍼持隈八見ふ。堪ぞ。韓錦と。敷ゑんと。惴る身と。起を
時取ゑ。ゑ。ゑ。ゑ。腰刀と。抜ゑ。ゑを。樅二郎い居く。腕を。挿て。臂と。拔ゑて。双と
抜ぜ。怯む。を。ゑ。と。向脛拂て。仆ゑ。所を。突。飛ぜ。何い。一霎時も。溷。ゑ。隈八も
ふ庭。眞身と。放下され。苛三。ゑ。仆ゑ。上ふ。伏。ゑ。起ゑ。遣ゑ。春蝕けり。然ゑ程ふ
範的。今這。夏の光景。ふ。舌を。吐ゑ。道と。呆れて。面。ふ。醉ゑ。ゑ。像く。只憤恨。胸ふ
盈て。のゑ。べゑ。あらさゑ。ゑと。ゑ。ゑと。思ふ。ゑ。ゑを。色。ゑ。出ぞ。社。極。命て

恭しく的に向ひて御所望実に黙止がたし。酷く無禮を仕り奴既に御用の果れば身の暇をゆるべ。異日見参仕らむと告別ある身を起して後門を投て退出けり。是時郡司が家の若黨小廝幾名彼居角觝の勝負を見んとて次の間にうち集合て。障子に唾して穴を穿ち覗観る者ヨヽろ赤に思ふも似ぜ與醒て呆惑ふ中に。今樅三郎が出てゆくを見るとゝども送りもせぞ他が在らまゝ時衆皆慌忙たゝ。齊一庭に走下て。仆まし苛三隈八を扶起て勦ゝ肩に引被て出ぬ。是今鏑野的が韓錦樅三郎に怨を累ねて遣る方もあらざりけん。後竟に奸計をなす。彼身を幸に陷とゝる。是其支の原なりけり。畢竟苛三隈八が韓錦に投懲さまゝ。後の話説甚麽ぞや。開き又巻を更めん。且下回に解分ちを聽給へ。

新局玉石童子訓巻之二十三終

村田